季刊 vol. 212

NAGOYA CITY MUSEUM NEWSLETTER

名古屋市博物館だより

編集・発行／名古屋市博物館　〒467-0806　名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1
TEL(052)853-2655　FAX(052)853-3636　http://www.museum.city.nagoya.jp

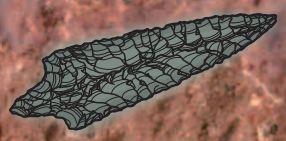
平成27(2015)年1月1日発行　(年4回1・4・7・10月)
3,800部発行　無料
古紙パルプ配合再生紙使用

特別展

感じる縄文時代（かんじるじょうもんじだい）

開催中 → 2月8日(日)

会期中の休館日
12/29～1/1～3(年末年始)、1/5(月)、13(火)、19(月)、26(月)、27(火)、2/2(月)



最新の発掘調査の成果を紹介！　田原市・宮西遺跡　愛知学院大学

どんなくらしをしてたの？

1万3千年の間には、あたたかいときもさむいときもあったし、場所によっても気候がちがっていたけど、時期や地域によって少しずつちがう環境にあわせて、動物やサカナをとり、貝や木の実などをあつめてたべるくらしをしていたのが縄文時代なんだ。

どうして縄文時代っていうの？

はじめて見つかった土器に縄でつけたもようがあって、その土器を縄文土器ってよんだんだ。それで「縄文土器をつかっていた時代」っていう意味で縄文時代っていうようになったんだよ。

上はストローのような道具でもようをつけ、下は縄文をつけた土器　南山大学人類学博物館

縄文だけじゃなくて、いろいろな方法でもようをつけた土器があるんだ。

いまから1万6千年前ころにはじまった縄文時代。人々は狩りと採集で食べ物をとるくらしをしていたんだ。縄文土器や石器はもちろん、動物や貝、木の実も展示して、そんな縄文時代のイメージをたのしく「感じて」ほしいなって思って「感じる縄文時代」っていうタイトルをつけたんだ。

縄文人が食べたもの
上左；シカ(角と下あごの骨)　名古屋市・雷貝塚
上右；貝(カキ、ハマグリ、オキシジミなど)　名古屋市・雷貝塚
下；ドングリの一種(アベマキ)　豊田市・寺部遺跡　豊田市郷土資料館

粘土ひもをはりつけてもようを描いた土器

ストローのような道具で描いたもようのある土器

矢じり(石鏃)　犬山市・入鹿池遺跡
矢の先につける石器。
弓矢をつかって動物の狩りをした。
上はつけたときの想像図

ぐーが縄文時代を案内するよ。
「感じる縄文時代」展イメージキャラクター「ぐー」
デザイン■武穂波さん(名古屋市立大学芸術工学部)

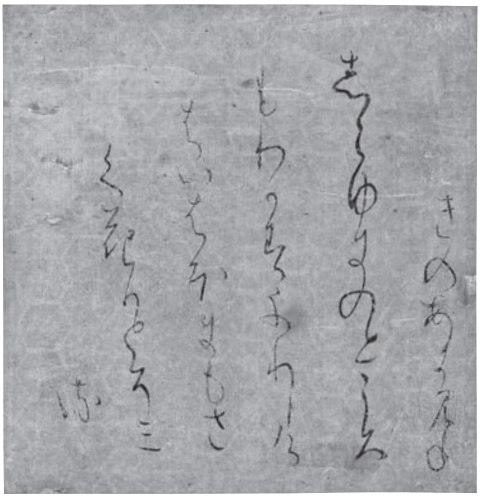
縄文人も登場！　身長158センチ、男。
名古屋市・玉ノ井遺跡　名古屋市教育委員会

観覧料■一般　600(400)円／高大生　400(200)円／中学生以下　無料
(　)内は20人以上の団体料金
名古屋市交通局の一日乗車券・ドニチエコきっぷを利用して来館された方は100円割引。
身体等に障がいのある方は手帳の提示により本人と介護者2名まで当日料金の半額。
各種割引は重複して利用いただくことはできません。

主催■名古屋市博物館、南山大学人類学博物館
協力■名古屋市立大学、愛知学院大学
開館時間■9時30分～17時(入場は16時30分まで)

思い出の「寸松庵色紙」

平安時代の書の名品もたくさんお目見えする「書の散歩道」展がいよいよ始まります。今回は、出品される作品の中から、「寸松庵色紙」の“書”についてご紹介します。



重要文化財　寸松庵色紙「しらゆきの…」（個人蔵）

きのあきみね（支）（見）（年）
しらゆきのところ（志）（支）
もわかずふりしけ（可）（春）（利）（介）
ばいはほにもさ（者）（者）（本）（介）
く花かとぞみ（可）（曾）（三）
る（流）

【図１】

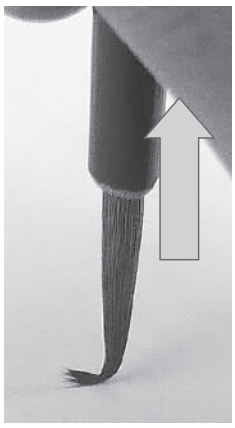
【寸松庵色紙とは】

「寸松庵色紙」は我が国最初の勅撰和歌集（天皇の命令で編まれた歌集）『古今和歌集』中にある四季の歌を選んで、平安時代に書かれた冊子本の断簡です。「寸松庵色紙」という名は、この色紙を持っていた武将で茶人の佐久間将監実勝（1570～1643）が、京都大徳寺にある“寸松庵”で愛玩していたことにちなみます。今回展示される「しらゆきの…」の紙面構成は、行の高さや幅を揃えて、縦書きノートのように垂直に書いていく“行書き”ではなく、書き出しの位置や行の高さ、傾きに変化をつける“散らし書き”と呼ばれるものです。使用されている紙は蝋箋という独特な紙です。

実際に…書いて感じる凄さ

書との接し方は様々ありますが、今回は私自身が“臨書”したものと実物を比較して感じた凄さをお話します。臨書とは、実際にまねて書くことによって、その書の魅力を、技術的な側面からダイレクトに感じられる最もポピュラーな書の学習方法です。

ではまず「寸松庵色紙」を見てください。特に２行目、“ゆ”の字の中で線の太さが徐々に変化しながら“き（支）”に続いています（図１）。太い線から細い線へと変化していくには、太く書くために圧力をかけていた筆先を引き上げつつ、筆先だけにほんの少し力を残して細い線にしていかなければなりません。筆を押さえつけることは簡単ですが、戻ろうとする力をコントロールすること、つまり筆を引き上げるという行為こそが最も難しく、かつ“上手さ”がわかるところでもあるのです（図２）。



【図２】“筆の引き上げ”が、書の上手さを示すバロメーター

また散らし書きの中でも、行が傾いていく紙面構成は、垂直に書いていく行書きと異なるため、技術的にまねることが難しいものです。特に最後の一文字“る（流）”の位置が私にとって最大の難所で、何度書いても位置を見誤ってしまいました。多くの古筆を臨書しましたが、この「しらゆきの…」は、特にバランス感覚を要求される作品だと改めて感じています。

実際に…見て驚く

今回初めてじっくりと実物を観察してみました。実物は写真よりも線が繊細でありながらも全体にハリがあり、改めて力加減が絶妙な書であることを実感しました。一方で驚かされたのが紙の質です。実物の紙はまったりとした質感で、光沢が見受けられないのです。以前市販されている「寸松庵色紙」専用の光沢感のある蝋箋で書いたことがあったので、実物に抱いていたイメージが覆りました。と同時に、線の美しさや文字の形をまねようとするあまり、蝋箋ではない書きやすい紙に清書し、紙の質感にまで気を配って臨書しなかったことにも気づかされました。改めて本物に迫る難しさを実物は私に教えてくれました。

大切なことに気づかせてくれる存在へ

私にとってこんなほろ苦い思い出がある「寸松庵色紙」。学芸員になって半年経った今だからこそ“本物の凄さに迫り、そしてそれをどのように発信していくのか”ということを、常に考えさせてくれる存在となっている気がします。

（星子桃子）

企画展

エピソードでたどる 書の散歩道

Walking with Calligraphy

Q & A

明けましておめでとうございます。新年と言えば「年賀状」ですが、葉書に手書きの伝統的スタイルは年を追うごとに遠くなっていくようです。でも、印刷面の余白に直筆で二言三言書き添えられているものを見ると、とても心に残ります。筆跡の向こうに相手の顔が浮かんだりして…。まさに「書は人なり」といったところですが、その「書」をテーマにした企画展がこの春開かれるというので、その準備で年賀状を書く暇もなかったという、担当の山本学芸員に聞いてみました。

Q　「書」と言いますと、博物館では最も地味、と申しましょうか、敬遠されがちな展示品だと思いますが、あえて「書」を主役に取り上げたのは？

A　お客さんがひしめき合う展覧会場で、書のところだけが閑散としている図、というのはよく見ます。「なんだ字か」とつぶやいて足早に去って行く後ろ姿に悄然とした想いを味わったのも一度や二度ではありません。その一方、穴の空くほど熱心に見て下さる方がいるのも書なんですね。一見しただけではわからないけれど、踏み込んだところには面白さが潜んでいる…。「難しい」「読めない」という壁をできるだけ低くして、その面白さの入り口にご案内したいというのが、この展覧会の目指す所です。

Q　確かに昔の字は今の私たちにはチンプンカンプンですが、どうやって壁を低くするのでしょう？

A　ひとつには、歴史上の有名人の筆跡を取り上げてみました。たとえば藤原俊成、栄西、日蓮、無住、徳川家康、松尾芭蕉、与謝蕪村、良寛、葛飾北斎、滝沢馬琴、勝海舟や伊藤博文など、平安時代から明治にいたる約四十人の生の筆跡を一堂にお楽しみいただこうと思っています。

Q　なるほど、教科書に出てくる人ばかりですね。徳川家康や葛飾北斎がどんな字を書いたのか、読めなくても見てみたいですね。なかでおすすめは？

A　たとえば日蓮、鎌倉時代を代表する人物と言っていいと思いますが、この日蓮の手紙はすごい迫力です。初めはさっぱり読めないのですが、筆跡を目でたどっているだけで日蓮の存在感が際立ちます。また、勝海舟の最後の書、つまり絶筆も心洗われるような清らかな一幅なんです。

Q　どんな事が書かれているんですか？

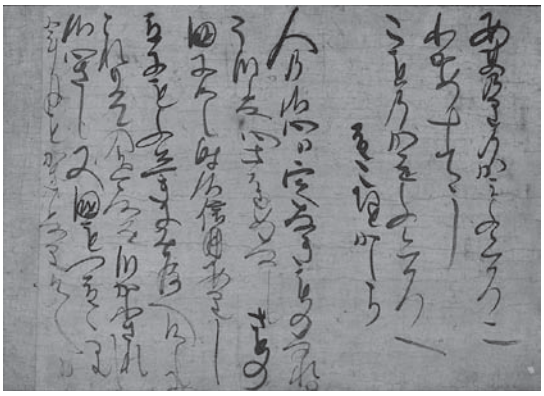
A　自らを律するには秋気のような厳しさをもって、処世にあたっては春風のようなおだやかさをもって、という海舟の処世訓が漢文で書かれています。同居していた孫の妻に贈ったものだそうです。海舟のドラマチックな人生の最後に、灯台のようなこの一幅が点っているのは心憎いばかりです。

Q　「エピソードでたどる」とありますが？

A　はい、海舟に限らず、その書にまつわる小さなエピソードを紹介し、それが書かれた一瞬の筆者の気持ちを想像していただけたらと思っています。

Q　他にも壁を低くする工夫はありますか？

A　書を楽しむ方法はひとつではありません。裏から斜めから、いろんな見方を用意しました。たとえば女性の筆跡を集めたり、足利尊氏、織田信長、豊臣秀吉といった武将たちのサイン（花押）を並べたり、美しい紙（料紙）も見応えがあります。また、書といっても紙に書かれたものばかりでなく、「国歌（君が代）」が縫いとられた小袖や、硯箱、矢立などの文房具も出品しますから、お気に召すまま、気軽に展示室を散策していただきたいと思っています。



日蓮書状（冒頭部分）　鎌倉時代　妙勝寺蔵

なるほど、それで散歩道なんですね。歩き方も行き着く場所も人それぞれ、展示室を出る時に、あなたの「書」に対するイメージはどう変わっているでしょうか？

さまざまな切り口でお迎えするこの展覧会の見どころを、次の頁でご案内しましたのでご観覧の参考になさってください。

（山本祐子）

◉企画展

企画展

エピソードでたどる 書の散歩道

Walking with Calligraphy

2015年 2月28日(土)～4月5日(日)

人は死して筆跡を残す…

歴史に名を残した人の書、時代を語る書、芸術とし時代にはさまざまな書が伝えられています。それぞれ人となり、その時代の雰囲気が立ちのぼってきます。封じ込められているのです。

この展覧会では、古代から近代にわたるさまざまなで、その魅力を探っていきます。

エピソード 2

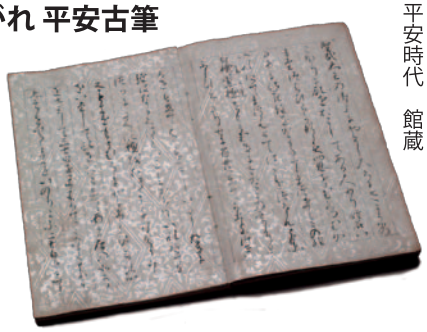
高僧だってたまにはぐちもこぼしたい
ー資金難に殺人事件、坐禅や喫茶どころじゃないー

栄西(ようさい・えいさい)といえば、平安時代の末期、二度も中国(宋)に渡ってわが国に禅と茶とをもたらしたエリート僧。日本臨済宗の開祖として有名です。俗世間とは無縁のイメージですが、その晩年には、平家によって焼かれた東大寺の再建という大変な難事業に巻き込まれてしまいました。資金難に加え、「大仏殿回廊内殺人」事件までが勃発。栄西はこの未曾有の不祥事に愁嘆し、悲しみの涙に暮れました。この知られざる栄西像は、近年、大須観音(宝生院真福寺)にある文庫から発見された15通の手紙によって明らかになりました。今回は、その内から3通を紹介します。

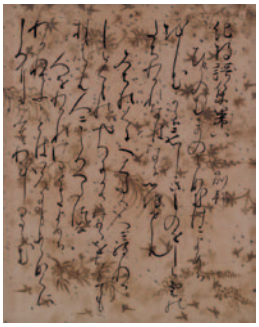
愛知県指定文化財「栄西書状」鎌倉時代 大須観音蔵

エピソード 18

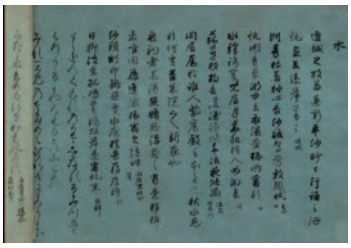
永遠のあこがれ 平安古筆



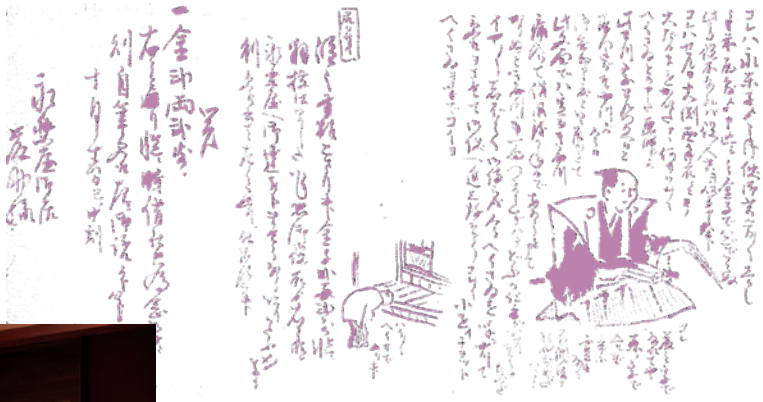
重要文化財『三宝絵』平安時代 館蔵



「石山切」平安時代 法音寺蔵



「関戸本和漢朗詠集切」平安時代 八勝館蔵



エピソード 12

借金はかくいたすべし
ー北斎先生に聞く、借金の仕方ー

「葛飾北斎絵入り書状」 江戸時代 館蔵

真ん中で腰を折ってへりくだっているのが北斎。後ろ姿ながら、まぎれもない北斎の自画像!?

エピソード 14

絶筆、最後の書ーすべて春風の面を払って去るごとき心境ー

勝海舟は、娘の嫁ぎ先である疋田家でその晩年を過ごしました。孫の妻たつは海舟のお気に入りで、海舟が揮毫の際、かたわらで墨をすったりしたのだそうです。そのたつに与えた処世訓が、海舟絶筆として伝わっています。「己を律するはよろしく秋気を帯ぶべし、世を処するはすべからく春風を帯ぶべし」。海舟晩年の語録集『氷川清話』にも「天下の事、すべて春風の面を払って去るごとき心境、この度胸あって始めて天下の大局に当たることができる」という一節があります。明治維新の大立者は、春風のように颯爽とした筆跡を遺して去って行きました。

勝海舟筆 一行書「律己宜帯秋気…」と所用の椅子 明治 館蔵

※背景の床の間は勝海舟と関係ありません。

「住吉蒔絵硯箱」 山本春正作　江戸時代　館蔵

ての書、実用としての書など、私たちの
の書からは、筆を執った人の息づかいや
書の中には失われた一瞬の時間や思いが

書をひもとき、ちょっと変わった切り口

エピソード 22
時代を生き抜いた女性の書から
ー殿様には強い母がいたー
「相応院書状」 江戸時代　館蔵

「雪持ち桐に文字模様小袖」
江戸後期～明治　館蔵

エピソード 30　**縫いとられた「国歌」**
ー薄命の姫の嫁入り衣装ー

「君が代」は、もとを正せば『古今和歌集』に収められた賀歌でした。それが国歌としての道を歩み始めたのは明治２年のこと。対外的に儀礼用の国歌が必要となり、この和歌に白羽の矢が立ったのです。奇しくも同じ頃の明治４年、嫁いだお姫様がいました。尾張徳川家 12 代当主斉荘の４女釣姫です。釣姫は婚礼後、わずか３か月で亡くなりましたので、「君が代」の歌が縫いとられたこの小袖は釣姫の形見として遺されました。格式の高い姫君の嫁入り衣装に、伝統のある、かつ当代の脚光を浴びた歌をあしらう。そんな粋なはからいを想像してしまう小袖です。

30のエピソード…裏から斜めから、こんな見方はいかがです…

◉企画展

第一章　〈書は人なり　歴史に名を残した人の書〉

1　どちらが若書き？先端を行く歌人の筆跡　**藤原俊成**筆「昭和切」「日野切」
2　高僧だってたまにはぐちもこぼしたい　「**栄西**書状」
3　人の御心は定なきもの…　「**日蓮**書状」
4　弟子に残す言葉　重要文化財　**無住**筆「置文」
5　戦国武将の遺言状　「**森長可**遺言状」
6　えっ、殿様自筆の領収書　「**徳川家康**尾州年貢皆済状」
7　やはり手紙が魅力　「**本阿弥光悦**書状巻」
8　花開く個性　**近衛信尹・角倉素庵・烏丸光広・小堀遠州・松花堂昭乗**
9　44 歳、彼を変えたのは旅　**松尾芭蕉**筆「いざ出む」発句懐紙など
10　希代の画家の字は、意外にユーモラス「**与謝蕪村**絵入り書状」
11　無欲の境地　**良寛**の書
12　借金はかくいたすべし　「**葛飾北斎**絵入り書状」
13　雨の日は「大惣」へ行こう！　キャッチコピーが得意だった**滝沢馬琴**／「大惣」こそ心のふるさと、**坪内逍遙**
14　絶筆、最後の書　**勝海舟**筆　一行書「律己宜帯秋気…」
15　帝国議会、嵐の船出　「**伊藤博文**書状」

第二章〈筆跡ラプソディー〉

16　一切経の世界
重要文化財「七寺一切経」・重要文化財「過去現在絵因果経」
17　これぞ茶掛けの最高峰　重要文化財「寸松庵色紙」
18　永遠のあこがれ、平安古筆　重要文化財『三宝絵』など
19　三人の**西行**　重要美術品「白河切」など
20　書の世界に新風　**伏見天皇**筆「筑後切」など
21　中世にもあった再生紙　「**後光厳天皇**綸旨」など
22　時代を生き抜いた女性の書　天皇の母の走り書き　重要美術品「**広義門院**所領処分状」／桃山キャリアウーマンの書**幸蔵主**筆「**北政所**黒印状」／殿様には強い母がいた「**相応院**書状」など
23　擬宝珠に刻まれた母の想い　「裁断橋擬宝珠」
24　勢揃い、武将たちのサイン　「**足利尊氏**袖判禁制」・「**織田信長**書状」・「**羽柴秀吉**書状」・「**徳川家康**書状」・「**伊達政宗**書状」など
25　ぬれぎぬを晴らす魔法の紙　「**松花堂昭乗**起請文」
26　三行半の美学　「去り状」など
27　一目瞭然 冷泉フォント　**藤原定家**筆「紹巴切」・**冷泉為理**筆「和歌懐紙」
28　筆跡のコレクション　古筆手鑑「宝墨亀鑑」・「古筆貼交屏風」
29　絵と書の競演　「源氏物語色紙貼交屏風」「伊勢物語手鑑」
30　縫いとられた「国歌」　「雪持ち桐に文字模様小袖」

付章〈書の周辺〉

奈良時代から江戸時代の硯・水滴・矢立などの文房具

変わらない？お正月

変わらない雑煮

平成27年を迎えました。みなさんはどのように正月を過ごしましたか。名古屋では、すまし汁に四角の餅、正月菜（もち菜）やかつお節が入った雑煮を食べた方も多いのではないでしょうか。

餅の形、汁の味付け、具の種類などは地域によって異なり、日本各地には様々な雑煮があります。正月のような特別な日の料理は急激に変わることはありません。そのため、現在でも地域ごとに特徴のある雑煮が食べられています。

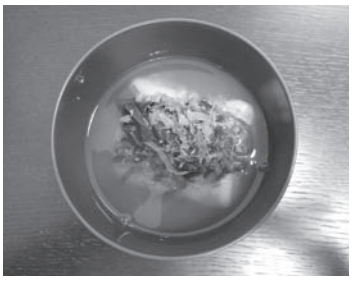


写真１　名古屋の雑煮

変わるおせち料理

雑煮の他に正月に決まって食べるものといえば、おせち料理が思い浮かびます。名古屋タイムズという新聞の紙面をみると、おせち料理が変わっていく様子が分かります。

かつておせち料理は、各家庭で準備するものでしたが、紙面上では昭和30年代以降、デパートで販売されるおせち料理の記事や広告がみられるようになります。

昭和32年には「ゴッタ返す食品売り場」という見出しで、持参した重箱に購入した料理をつめてもらう様子が記されます。昭和39年には「おせち料理予約販売はじまる　若い人向きに洋、中華風も」という見出しで、２，３年前からどこのデパートでもおせち料理が販売されていると記されます。

インスタント時代のお正月

大モテ　既製おせち料理

料亭が自慢の味つけ

一段向きは2000円クラス

和、洋、中華とバラエティー

写真２　昭和43年の記事（昭和43年12月12日）

昭和43年の「インスタント時代のお正月」(写真２)という見出しの記事では、「年一度のおせち料理は手づくりのものを、という考え方の人もまだまだいるが、半面、デパートなどで既製のものを買ってすませる人が年々多くなっている」というように、人々の意識が変わりつつあることが記されます。

このように昭和30年代から40年代にかけて、デパートなどでおせち料理を購入することが広まったと考えられます。

お正月料理の意識

もちろん新聞紙上に記されたことが、すべての人に当てはまるわけではないでしょう。ただし、その後も「手間いらずお好み次第 おせち料理」(昭和45年)、「おせち料理も既製品時代」(昭和46年）という記事のように、既製品のおせち料理の需要が衰えることはなかったようです。

また、おせち料理の広告では「奥さまに代ってお料理した」(写真３）という宣伝文のように、家庭で作ったおせち料理と同じ価値を持つことが強調されています。「奥さまのお気持ちになって味付けした」「奥さまに代って腕をふるった」など、昭和30年代から40年代にかけて、各デパートの広告には同様の宣伝文がみられます。この時期は人々の価値観が変わっていきましたが、まったく考え方が変わったわけではないでしょう。「奥さま」の存在を強調した広告をみると、正月には「奥さま」(主婦）の料理を家庭で楽しむという意識は変わっていないように感じられます。

正月の料理には変わらない部分と変わっていく部分がありました。それでも、家庭という料理を楽しむ場そのものについての意識が変わらないことによって、変わらずに正月を過ごしているように感じるのかもしれません。　　(長谷川洋一)

奥さまに代って
お料理したおせち料理が
広い会場にいっぱい!!

おせち料理大会
8階・30日・31日催場

おせち料理詰合せ……700円
おせち料理詰合せ……1,000円
塩数の子……300円から
川海老……260円から
栗きんとん……110円から
たつくり……80円から
紅白蒲鉾……100円から
焼津亀煎……100円

写真３　昭和41年の広告（昭和41年12月29日）

伊勢湾台風55年
白水小学校の作文の公開

白水小学校から博物館へ

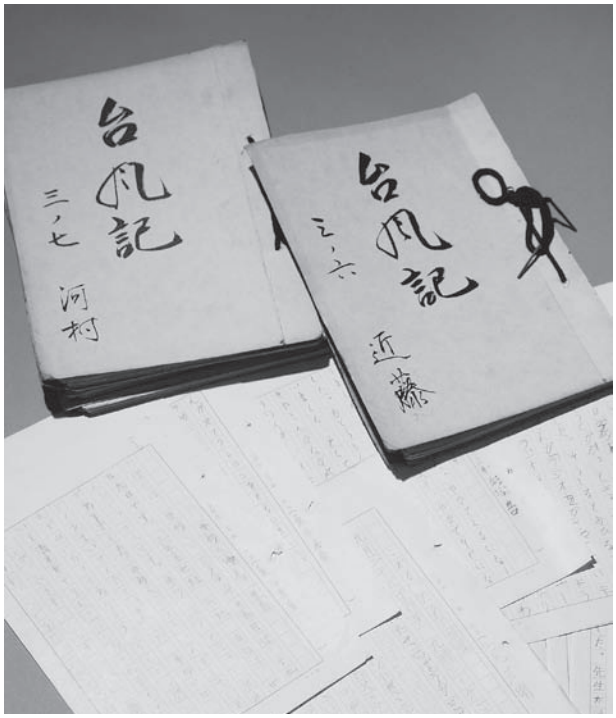
南区に所在する名古屋市立白水小学校では、伊勢湾台風で142名もの児童が亡くなり、学校や学区の家々は破壊され、大きな被害を受けました。こうした被災状況を、小学校が再開してしばらく後に、児童・教師らが作文にまとめました。これらは、長らく白水小学校で保管されてきましたが、将来的な保存を憂慮され、博物館に相談がありました。博物館としては、これらの作文が自然災害を伝える貴重な歴史資料になると考え、このような資料を保存・公開していくことが博物館の使命でもあるので、平成26年２月に受贈することになったのです。

作文の公開へむけて

しかし、懸念されることがひとつありました。

それは、作文を書いた人には著作権があることです。また、書いた人の個人名が書かれていることにも注意しなければなりません。さらに、55年前といえども、悲惨な状況が書かれた作文を公開することによる心の問題も考慮する必要があります。このため、基本方針として、作文の公開には、書いた人の同意を得ることにしました。

ただ、博物館が独自で書いた人を探しても限界があるので、一部事前に許可を得た作文の展示をしつつ、「作文を書いた人を探しています」ということを打ち出した企画を立ち上げることにしました。



開催期間は、伊勢湾台風がきた９月26日を含む、平成26年８月27日から９月28日とし、開催までに大急ぎで、全作文の写真を撮影し、書いた人の学年・クラス・姓名のデータベースを作成し、問い合わせがあればすぐに探せるように準備をしました。

55年ぶりの再開

展示自体は、ケース２本に10数人分の作文と当時の被災状況の写真を20数枚を展示する小規模なものでしたが、報道関係の関心も高く、展示終了までに10社以上の取材があり、多くの方に来館いただけました。来館者、特に実際に被災された方からは、当時の様子をお聞きすることが出来ました。

また、地元の皆さんの協力もあり、狙いどおり当時白水小学校に在籍したという方からの問い合わせも多くいただきました。今回はできるだけ現物を見ていただきたいと思い、博物館へ来館いただき、実際に自分が書いた作文を読んだうえで、公開の許可をお願いしました。博物館に足を運ぶという面倒をかけましたが、会期終了までの１ヶ月少しの間に、こちらの予想を上回る、136件のご許可がいただけたのです。

実際に作文を読んだ多くの方が、55年前の自分が書いた作文との対面に感動され、心を揺さぶられたようでした。「こんな字を書いていたんだ」、「家族や友人に伊勢湾台風の体験を話すことがあるけれど、作文に同じことを書いてある」など様々な感想が聞かれました。当時のことを語り、涙される方もいらっしゃいました。また、作文には書けなかった辛い体験を記憶している方もいました。

「作文を読んで新たなことを思い出しましたか？」というアンケートには９割の方が「はい」と回答され、こうした記録が、記憶を呼び起こす強力な起爆剤になることを再認識しました。

博物館の役割

博物館は資料を保管するだけでなく、活用することも大きな使命です。今回の企画は、体験者の話を多く聞くことができ、博物館の展示が、情報収集の場として機能し、さらに来館者に伝えられる場となることを再認識する機会となりました。

これらの作文は、今後伊勢湾台風の被害やこどもが感じたことを伝える「語り部」となってくれます。多くの作文を公開できるように、当時白水小学校（分校であった現柴田小学校を含む）に在校された方は、ぜひご連絡ください。　（瀬川貴文）

資料紹介

知多郡内福寺村検地帳

慶長13年（1608）　購入

中学や高校の日本史の教科書で、武士が田畑にさおを立て、縄を張って面積を測量している検地のさし絵を見たことがあると思う。検地の結果を記録した検地帳から、江戸時代初期の検地の実態や村の土地利用のようすをさぐってみよう。

知多郡内福寺村は内海谷11ヶ村の１つで、現在の知多郡南知多町内海、名鉄内海駅の東方約１～２kmの地点にあった村である。内福寺川の浅い谷に田畑が広がっていた。17世紀後半の記録によれば、元高372.618石、家数38軒、人口243人の、それほど大きくない村である。18世紀前半の記録によれば、「山隈ノ村落ニテ小百姓バカリ、農業ヲ専ラ生産トシ、商ヒヲ兼ネル者ナシ」とあるように、農業だけの村であった。

この資料の名称は「知多郡内福寺村検地帳」としたが、正確には写真のとおり「内福寺村本田田畑水帳」である。「水帳」とは検地帳のことであり、検地で縄を使うので「御縄打水帳」などともよばれる。この検地帳は備前検の際に作成されたものである。備前検とは、慶長12年、徳川義直が甲斐から尾張に移封されたことにより、翌慶長13年、幕臣の伊奈備前守ら３人の検地奉行によって尾張全域で実施された検地をさす。検地は７月20日、春日井郡矢田村（または大幸村）から始まり、３ヶ月後の10月20日に知多郡南端で終了した。この検地帳の巻末に「慶長拾三戊申十月」とあり、内福寺村は知多郡の南端に近いので、検地は10月20日直前に実施されたのであろう。巻末には野田惣左衛門ら３人の名前が記されているが、彼らは伊奈備前守配下の役人である。

検地帳の正本は領主（尾張藩）に納められたが、村にも控えとして副本（控え）や写本が残された。それは庄屋が各百姓に年貢を割り付ける際、基本台帳となった。この検地帳も村に残った副本、写本であろう。

備前検で作成された検地帳には、地目（上田～下畑、屋敷地）、反別（面積）および名請人（土地所有者）名が字ごとに記される。ただし一般的に一筆ごとの高も、その合計である村高も記されなかった。そのためこの年の年貢高は免（年貢率）で村に示すことができず、地目ごとに１反あたりの年貢高を示すしかなかった。ところが内福寺村の検地帳は、地目別に１反ごとの標準高（石盛という）が巻末に記されている（下表参照）。なぜ内福寺村で石盛を示したのかは不明であるが、備前守が検地作業の終了間際になって、石盛を決めないと年貢徴収に不便であると気づいたのか、あるいは後日石盛が決定された後、村で書き加えたのかもしれない。

巻末

表紙

本文

この検地帳によれば、３分の２が田地で地目は中田が多く、畑地では生産性が低い下畑が大半であった。また、この検地帳は、検地以後の名請人名が加除訂正されたり、新しい名請人が貼紙に表示されたりしている。名請人ごとに田畑のデータを集約すると、江戸時代初期の内福寺村の農民構成がわかるであろう。

なお、『南知多町誌　資料編４』に全文が翻刻、収録されている。　（種田祐司）

知多郡内福寺検地帳内訳

地目	面　積	石盛	石　高
上田	6町8反5畝29歩	1石5斗	102石8斗9升5合
中田	10町　6畝20歩	1石3斗	120石8斗6升7合※
下田	5町9反6畝12歩	1石1斗	65石6斗　4合
上畑	1町　6畝7歩	1石1斗	11石6斗8升6合
中畑	2町3反5畝18歩	8斗	18石8斗4升8合
下畑	7町　5畝29歩	5斗	35石2斗9升8合
屋敷	6反1畝	1石2斗	7石3斗2升
合計	33町7反7畝25歩		362石5斗1升8合

※計算では130石8斗6升7合

この資料は、現在常設展テーマ８「尾張藩の成立」のコーナーで展示しています。